

## モノから読み解く文明史の多様性

稲畑耕一郎著

出土遺物から見た中国の文明

地はその宝を愛します



新書判 184頁  
 潮出版社  
 [本体 889円 + 税]

## 角道 亮介

中国はやっぱり広い。本書を読んで、あらためてそのことを思い知った。中華人民共和国は日本の約二五倍の国土と世界一位の人口を擁する大国であるが、数字が押し付けがましく訴えるデータを見ても、ピンと来ないものである。むしろ、その広大な大地にかつて暮らし今も暮らす人々の連綿と続く多様な生き様に思いを寄せたとき、はじめて中国はその広大な大地を我々の眼前に見せてくれるのではないだろうか。著者の言葉を借りるならば、中国の文明が持つ「重厚長大」を知ってはじめて、「中国とは何か」というとても大きな問題に近づくことができる。そして、その「重く、厚く、長く、大きい」人々の営みを理解するために、出土資料ほど便利な手がかかりはないのである。

私事で恐縮だが、私はかつて中国に留学する際に指導教授

から一つ宿題を課された。いわく、「留学期間中に、中国全土を回ってとにかくできる限り各地の遺跡とその地の風土を見てください」というものである。当時まだ素直な学生であった私は先生の言いつけを真面目に守り、ろくに大学の授業にも出ずに遺跡めぐりばかりをしていた。二年間の留学期間を存分に利用して中国全省の主要な遺跡をすべて踏破するつもりでいたが、やっぱり中国は広くて深かった。たとえばこのかの田舎へ遺跡を見に行くと、大量の出土遺物が出ている。その一つ一つが興味深い資料であるが、たまにいくつか異端児が紛れ込んでいて、山を二つ越えた向こうの遺跡で作られたものだったりする。なぜ紛れ込んでいるのか、そちらの遺跡でもこっちの資料が紛れ込んでいたりするのか、気になっ

てしまうともうだめで、当初は行く予定のなかった向こうの

遺跡に山を越えて行ってみる。こうして、三日の旅程は知らぬうちに一週間になり(そして、この途中でいただく地元料理がこれまたとてもうまいのだ)、気が付けばもう帰らねばならない時間になっている。こうして留学期間中に全省をめぐるという私の夢は叶わなかったが、その挑戦は今もなんとか続けている。結局なにが言いたかったのかというと、中国は広いということと、遺跡を実際に歩いて出土遺物を見ることはとてもおもしろいということである。

遺跡と、そこから出土した遺物への理解を通じて中国の文明の歴史を知ろうとするとき、本書は非常に多くの示唆を与えてくれる。本書が扱う一五の遺跡はいずれも学術的な価値の高い一級の遺跡たちであるが、古くは新石器時代から近くは宋代まで、おおよそ五〇〇〇年を超える時間幅のなかからピックアップされている。地域的な広がりも北は遼寧・銀川といった長城内外の草原地帯から南はメコン川の流域たる雲南高原まで、広大な中国の大地をほぼ網羅している。驚くべきは、時間的にも空間的にも多岐にわたるこれらの遺跡を、著者はすべて自分の足で訪れ、自分の目で見ているということである。これは生半可なことではない。いったいこれだけの遺跡を実見した日本人が(中国人を含めても)ほかに何人いるであろうか。実際の発掘現場を見、出土した遺物を手

に取って観察したからこそ、本書で語られる内容は本質的な説得力を持つ。中国の文明を明らかにするために様々な角度からその実態に迫ろうとする著者のゆるぎない姿勢が、ここに明瞭に表れている。

実際に、文物をただそのものとして見るだけではなく、それが出土した遺跡とあわせて考えることで新たな見識に至ることは多い。その好例は本書第三章で取り上げられる秦の始皇帝の兵馬俑である(七八頁)。有名な世界遺産であり、国内で幾たびも展覧会がなされているので、土で作られた兵士や馬の人形(俑)を見たことがある方も多いだろう。しかし、実際の遺跡はそんなものではない。何千という兵士像が地下に林立し正面を見据えるさまは、まず見る者を圧倒する。兵馬俑の背後に我々が見るのは、始皇帝の権力と彼の強い意志である。本書で述べられているように、継続的な発掘調査によって始皇帝陵内から様々な発見が報告されている。兵馬俑坑も含めた総体としての始皇帝陵の実像は、始皇帝が生きた時代をより雄弁に我々に教えてくれる。もう一つ遺跡の話をするならば、本書第二章の周原遺跡も興味深い(五六頁)。周王朝は孔子など後代の人々にとって理想の時代であった。その周の本拠地であった周原遺跡は、誤解を恐れずに言えば中国の人々にとっての心の故地でもある。周原遺跡の範囲内で

は、大きな建物の痕跡や貴重な青銅器を埋めた穴ぐらなど、いくつもの地点で重要な発見がある。この個々の地点はおおよそ五キロメートル四方の範囲に散らばっているわけだが、実際にこの範囲を歩いてみると、なんとも「手ごろ」な広さなのである。遺跡は広いが一日で歩いて回れない距離ではない。道すがら、北には岐山の峰々を仰ぎ、南には渭水が作った幾段もの黄土台地を見下ろす。当時の周王が歩いたであろう道をたどって遺跡をめぐる時、当時の人々の距離感というものがおぼろげに見えてくる。日本のヤマト王朝揺籃の地は奈良の飛鳥地方であるが、時期も地域も異なるものの、生まれたばかりの国家を育んだ地に一部共通する遺跡の空気を感しながら、古代人の思いに触れた気がするのである。

本書にはもう一つ重要な視点が隠されている。それは、ユーラシア大陸の一部分としての中国の姿を我々に再認識させてくれるという点だ。本書で紹介されたいくつかの遺跡には、いわゆる西方世界の文化的要素を色濃く残すものがある。あるいは中国世界の中心たる中原王朝を介さずに周縁地域の間での文化的な関連性を示すものもある。これらの遺跡から出土した遺物に触れながら、読者は中国の文明に息づく多種多様な文化の源流を知り、世界史の中の中国史を認識するのである。例えば、本書第三章で扱われる雲南滇国青銅器であ

る（九七頁）。本書で指摘される通り、滇国の青銅器のうちには動物闘争文と呼ばれる、北方の草原地帯に由来する意匠が遺物に表現されており、中原地帯をとりまく北方草原地帯（青海・チベット・四川の山岳地帯）雲南高原地帯という文化伝播帯があったことを物語っている。この動物闘争文であるが、古く中央アジアで活躍したスキタイの装飾品に早くも表れており、また類似するモチーフはより古い初期王朝時代の西アジアに見られるという。紀元前六世紀にアケメネス朝ペルシアの王、ダレイオス一世によつて建設されたベルセポリスの都に飾られた「グリフィンと戦う王」の図像も、大きい意味では動物闘争文と同じ流れの中から生まれたものである。文様ひとつの中にも、ユーラシアをつなぐ壮大な背景が内包されているのである。また、草原地帯から雲南高原をつなぐルートをつなぐ文化の一つにチベット仏教がある。チベット高原で成立したチベット仏教であるが、重要な寺院は拉萨のほかにも青海省のクンブム寺（タール寺）や雲南省のソンツェリン寺など中国西方の山岳地帯に広がっている。また、歴史的にオイラトなどのモンゴル諸部族の保護を受けてきたことを考えれば、チベット仏教の広がりはこのルートが果たした役割の大きさがわかるだろう。滇国青銅器の存在は、そのようなルートが非常に古く遡ることを示す、重要な証拠な

のである。

本書が提起する問題はこれにとどまらない。例えば第四章の宣化遼代壁画墓の項では、長城以南の伝統的な漢人の居住地が、契丹という北方系の王朝の版図の中に組み込まれてゆく中で、そこに暮らす人々がどのように文化的伝統を維持し、あるいは改めていったのかという問題を、「漢化」「胡化」をキーワードに、実際の墓の壁画から読み解いている（一三九頁）。ここで、異なる文化的背景が溶け合う境界地域で揺れ動く個々人の帰属意識という問題を、「中国化」「非中国化」という（かなり荒っぽい）言葉にまとめることをお認めいただけるならば、この問題は中国史の中で常に表れてくる重要なテーマとなる。たとえば北魏という王朝がある。中国で三国時代が終焉し、続く晋王朝が動揺して五胡十六国という戦乱の時代が到来した際に華北で成立した王朝であるが、もともととは北方の「非中国」である鮮卑族の一派が打ち立てた王朝であった。北魏の第六代皇帝にあたる孝文帝は、義理の祖母である馮太后とともに数々の漢化政策を行い、北魏の「中国化」を推し進めたわけであるが、そんな彼らが自身の墓に選んだのは、自らのルーツに連なる北方の草原地帯であった。馮太后の永固陵と孝文帝の寿陵は、ともに平城（現在の大同市）の北、草原地帯を見下ろし長城とも接する方山の上に築

かれている。世界史の教科書には漢化を進めた指導者として記される二人の帰属意識を考えると、遺跡から読み解けることも少なくないということ、どこまでも長城が延びる雄大な風景は教えてくれる。

紙幅の関係もあり、本書に収録されたすべての遺跡をここに取り上げることはできないが、中国の遺跡の数々はいずれもその背後に無限の文化的な広がりを見せている。そのような遺跡を縦横無尽に論じながらも内容をコンパクトにまとめた本書は、遺跡から歴史を読み解くための最良の書といえる。遺跡めぐりは楽しい。ぜひ本書を片手に、重厚長大な中国の遺跡を歩いてみてはいかがだろうか。

（かくどう・りようすけ 駒澤大学）